論 文 内 容 の 要 旨

Clinical Characteristics and Outcome of Alcohol Septal Ablation with Confirmation by Nitroglycerin test for Drug-refractory Hypertrophic Obstructive Cardiomyopathy with Labile Left Ventricular Outflow Obstruction

不安定な左室流出路閉塞を有する薬剤抵抗性閉塞性肥大型心筋症に対して、ニトログリセリン負荷試験を用いた経皮的中隔心筋焼灼術の臨床的特徴と予後の研究

日本医科大学大学院医学研究科　循環器内科学分野

研 究 生　　北 村 光 信

American Journal of Cardiology 2015;116, 945-951 掲載

【背景】閉塞性肥大型心筋症（　　）における左室内閉塞誘発試験として　　法や期外収縮後増強などが広く用いられているが、どの方法が適しているかは明らかではない。一方、硝酸剤は主に左室後負荷軽減により左室内圧較差を検出する方法として簡便な方法として用いられてきた。しかしながら、経皮的中隔心筋エタノール焼　　）中に硝酸剤負荷試験を用いた際の有用性について扱った報告は見られない。

　　患者の臨床的特徴を明らかに　と、　ニトログリセリン　　）の有用性について評　　対する　　の長期予後を評価すること、 的とした。

【方法】日本　学付属病院で　　施行した連続　　症例のうち重度　症、他院での　　治療例を除き　　圧較差＜
発 差≧　　時　≧　　、　　例）
を比較し調査を行った。

　経胸壁心臓超音波法を用い　された肥大型心筋症（　　）で安静時もしの左室内圧較　　以上の症例は　　断した。　療　　機能分類
Ⅰ　　心不全症状が残存し　　上の圧較差を有する患者を　　の適応とした。同時圧測定は左室心尖部と上行大動脈に留置したカテーテルにより行い、それぞれベースライ　ログリ　　）中、　　法、心室性期外 縮　　）の状態で行った。

　□　　ニトログリセリン（　　）　　を経中心静脈的に投与を行い、収縮期体血圧が最も低くなった時点　デ　　。血圧が低い症例（　　～　　）や高度　圧　　症例ではより少量（　　）　始した。

　　直後には同 の　　を用いて　　試験を行った。

　□□ 手技では体外式ペースメ ーを右室心尖部へ留置しながら行い、術後最低　時間 留　性　性期の心ブロックに対応した　　の　　用ガイディングカテーテ　　特注　　径（　　～　　）の　　バルーンを用いた。心筋コントラストエコーを用いて標的中隔枝の灌流範囲を確認し、非標的心筋への灌流　ことを確　　は中隔枝 本 たり　　で緩徐（　　）に注入した

　連 変数は平均値±標準偏差もしくは中央　　比較を行う際は連続変数に対　　、区分変数に対して　　正確
　　試験と他試験　　検
　　群と
。　　（Ⅰ　　、　　、　　）を用

い　　を統計学的有意と判断した。

【結　　群と比較して、心室中隔厚は薄
　非　　）左室重量は少　　）、肥大領域は少
（　　）、脳性ナトリウム利尿ペプチドは低か

　　群で、　　直後に安　差　　改善、
差　　へ改善した。周術期合併症として一過性完全 室ブ　が 例
（　　おり、そのうち 例で薬剤性の持続性心室頻拍症を認め植込型除細動器の植込み術を行 た。急性脳梗塞を 例認めたが明らかな神経学的後遺症は　な った
　　後 年　　分　　→　　へ改善し。　前に行　　験
　　、　　れも同等に　　以上　発できた
圧較差　　試験、　　認

　後の　　群では心臓突然死はなく　間の心
臓血管死　　群との比較で生 線に有意差は
認　った。

　本研究は　　中における　　試験の有用性　めての研究である。一
方　　らは潜在的圧較差を有する　　例の大規模研究で臨床的特徴と長期予後研究を報告している。これと比較して本研究はより高齢で
究で　　群と　　群の比較を行い、左室壁厚、　　値で有意な
相違を認めること　　応異常が
　が高く（　　）、左室内閉塞がより不安定で血圧変動を起こしやすいと考えられた。また一部の患者ではある一種類の方法に対する指向性を有しているため、圧較差は異なる誘発メカニズムを有 る　より評価すべ　ると考えられた。
　□□□□ 試験を用いた　　後に長期予後調査および生存解析を行い両群と比較した。両群間に統計学的有意差は認めず、アウトカムは海外の経験豊富 設からの
　　てい

　　群は　　群　室肥大　軽度であったが、
症状は同等であった。　　試験は　　手技中に
評価す　用であっ　　有する　　に対する　　の予後は良好で
あることが示された。